

はしがき (<特集>社会文化研究所共同研究「リスク社会と法」)

著者名(日)	鈴木 博康
雑誌名	九州国際大学法学論集
巻	18
号	1/2
ページ	1-3
発行年	2011-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1265/00000079/

特集「リスク社会と法」

はしがき

本紀要の特集「リスク社会と法」として、ここに掲載した論稿は、同名のシンポジウムの研究報告に基づいている。このシンポジウムは九州国際大学社会文化研究所共同研究「リスク化社会に対応する法制度の整備に関する基礎的研究」の共同研究を取りまとめた成果発表の場であった。われわれ共同研究のメンバーは、民法、行政法、刑法などの実定法から、企業法の実務、行政学などの研究を含む学際的な研究組織であるが、2009年度から2年間にわたって、法学と「リスク」の関係について議論を重ねてきた。

九州国際大学法学部においては、学部改革の一つとして、2009年度よりリスクマネジメントコースを設け、教育研究にかかわってきた。現代社会における、地域、企業、組織、世界、人類を取り巻く、いわゆる「リスク」なるものの存在を前にしたとき、その適切な把握とそれに対する(とくに事前の)合理的な対策を講じることで、危険発生を回避するとともに、万が一の危険発生に際しては、その損失・被害の最小化を図ること、すなわちリスクマネジメントが、今日の法化社会において、ますますその重要性が高まっているのではないかという認識に基づいたコース設計である。2年間を振り返ると、専門的な基礎的研究の上に成り立つ学部教育の教授というものを意識したとき、上記のような関心から法学部においてリスクマネジメント教育を実践するということは、この間のわれわれの共同研究は、各法域における既存の法概念・制度、諸問題を新たに「リスク」という視点でとらえなおした場合に、どのようなものとして理解・再構築できるのかという観点での確認作業でもあったように思われる。

むろん、リスクマネジメントなるものに対する認識をどのようにするかは一つの大きな問題である。リスクないしはリスクマネジメントという用語自体につき、どの論者においても一様に、その概念を共通のものとして用いているとは限らないからである。これは、現代の社会をどのような意味で「リスク社

会」とみるかという問題にかかるものであり、同一の社会に視線を向けるにしても、ある視点からはリスク社会と捉えられるかもしれないが、他面ではそもそもそれをリスク社会として把握することが果たして適切なのかという問題にもつながる。

したがって、共同研究当初は、特段にリスク概念を固定化することで議論を狭めることをせずに、自由な議論を可能とすることを考え、領域ごとに各研究者が当該専攻分野との関連ないし関心から「リスクマネジメント的なもの」についての考察を行う準備作業が中心となったのが、初年度2009年度の基本的な研究姿勢である。その結果、各領域のさまざまな視点に立った個性的な研究成果が得られたものの、全体的な整合性という連携が弱かったきらいがある。初年度の終わり2010年3月には中間報告の機会として第一回目のシンポジウムを開催したが、リスク概念の多様性（と同時に他分野でも述べられるところのリスクとの関連性の所在如何）については、フロアーからも寄せられた疑問であった。その後は、整合性、統一性を意識しながら、研究会での検討を重ね、また、最終年度たる2年目の2010年度末（2011年2月）の二回目のシンポジウム開催にあたっては、パネリストメンバーも、このような意図から一部組み替えたところがある。もっとも、本特集には、各パネリストの論稿を収録しているが、いずれもシンポジウムでの報告時間が25分程度と限られていた上、今この2年間を振り返ってみても、なお、依然として、「リスク」の概念定義がはたして明確になったのかという点については、必ずしも成功したとはいえない。しかし、それでもそれぞれの領域における研究成果としての深度はあったように思われる。

以下に、2011年2月開催のシンポジウムのパネリストとその報告題名を示す。なお当日は、渡辺と富永が総論的観点から、古屋、竹村、鈴木が各論的に議論を展開している。この他、コーディネーター、司会など各関係者の協力を得ている。記して感謝の意を表すものである。

渡辺守雄「リスク社会と法の接点」

富永猛「行政法からみたリスク社会」

古屋邦彦「契約リスク」

竹村仁美「グローバルリスク」

鈴木博康「刑事法からみたリスク社会」

ところで、2011年2月のシンポジウムののちに、2年間の研究の取りまとめをしようとしていたところに、われわれはあの3.11の大震災を経験することとなった。分野によっては、今回の震災の分析を踏まえて、全面的な洗い直し、すなわちリスクマネジメント概念の再構築もありえたわけであるが、基本的にはシンポジウムでの報告をまとめたものを掲載している。しかし、他方で、リスクマネジメントを研究してきた者としては、未曾有の震災となったこの東日本大震災を踏まえないわけにはいかないのではないかという思いから、急ぎよ、当初からの研究メンバーであった南博が、「東日本大震災に対する市民の意識」をテーマにまとめることとなった。なお、南の2010年のシンポジウムのパネリストとしての報告は「危機管理とリスク」と題して、リスクマネジメントと危機管理の定義及び関係といった概念整理を踏まえ、大学、学会等の社会科学系の教育・研究機関における危機管理教育・研究の全国的動向などの指摘をした内容であり、ここでの掲載も本研究の総論的な役割を担った論稿を予定していたが、先のような意図から震災にテーマ変更させていただいたことをお断りしておく。

亡くなられた方の冥福とともに一日も早い災害復興を祈念しつつ

共同研究を代表して 鈴 木 博 康